

地域に刻まれた記憶と事業承継：大堀相馬焼松永窯の復活

落合 康裕（静岡県立大学大学院経営情報イノベーション研究科 教授）

藤原 健一（一般社団法人日本ファミリービジネスアドバイザー協会 執行役員）

1. 沿革

松永窯は、1910年（明治43年）に福島県浪江町で創業、後に拠点を移し、現在では福島県西白河郡西郷村に本社を構える大堀相馬焼の窯元である。

以下、松永窯のホームページを参考に、大堀相馬焼の沿革を確認しておくことにしよう。大堀相馬焼とは、福島県双葉郡浪江町大堀を中心に焼かれた陶器の総称である。その歴史は古く、元禄年間にはじまり、当時は相馬焼と呼ばれていた。藩の奨励策もあり、江戸時代末期には窯元が100戸を越えていたようである。

1830年頃には、駒絵が描かれるようになった。1850年頃には、大堀の職人数名が、各地に陶器の技術指導に出かけている。例えば、現在の栃木県益子町を中心に焼かれた益子焼もその1つである。販路も北海道から関東一円、更には信州越後地方方面まで広がった。大堀は陶器の一大産地となった。

1863年（文久3年）には、大堀相馬焼の特徴である「青ひび」が作られ、1883年（明治16年）には、東京の間屋である宮内松五郎のすすめで、水金の「走り駒」（疾走する馬の絵）が始まる。また、1899年（明治32年）には、「二重焼」（二重構造）が創案され、ここに現在の大堀相馬焼の「青ひび」「走り駒」「二重焼」という個性が揃うことになった。大堀相馬焼に描かれている左馬（右に出る者がいない）や九頭馬（馬九行久＝う

写真1 大堀相馬焼（二重湯呑み）



（出所）同社より提供

まくいく）の絵柄は、長らく縁起物として親しまれてきた。

明治期から昭和にかけて相馬焼は衰退する。しかし、1950年代後半には、陶器の二重構造が「アイデアカップ」、「ダブルカップ」という名称で人気を博し、海外輸出ブームにもなった。1978年（昭和53年）に相馬焼は、国の伝統工芸品に指定され、その後は産地名である「大堀」の名を入れた大堀相馬焼として広く知られるようになった。このように、相馬焼は、福島県の代表的な地域ブランドの一つになった。

2. 大堀相馬焼の経営環境について

しかし、大堀相馬焼を取り巻く経営環境は必ずしも順風ではなかった。昔から続いていた一子相伝による参入障壁の高さ等もあり、市場の変化についていけず、売上は年々減少、後継者もいなく

なり廃業する窯元も少なくなかった。2000年（平成12年）当時の事業所の平均従業員数は2.9人であった。

大堀相馬焼は、戦後の輸出ブームやバブル経済といった、日本経済全体の好況期には実績を伸ばした。しかし、オイルショックやバブル崩壊といった経済の停滞期には、その影響をまともに受けるという、販売実績の振れ幅が大きい製品だった。特にオイルショック後の急激な円高により、海外市場を喪失し問屋はすべて廃業してしまう。問屋が担っていたマーケティング機能がなくなり、その後の大堀相馬焼は停滞を招くことになった。

大堀相馬焼は伝統工芸品の認定を受けたが、必ずしもメリットが大きいわけではなかった。認定検査を受けるためには検査料を払わなければならない、その分価格が上がってしまう。窯元にとっては、認定品と非認定品を並べておくことと消費者に対してその違いを説明しなければならない。伝統的工芸品ではない製品のイメージを落としてしまうことも多いため、この制度が十分に活用される状況ではなかった。その結果、事業所数や従業員数の減少傾向には歯止めがかからず、産業の活性化には結びつかなかった。

3. 東日本大震災の発生

大堀相馬焼を取り巻く経営環境が厳しい中、2011年（平成23年）3月11日に追い討ちをかけるようにして東日本大震災が発生した。産地である浪江町が帰宅困難区域に指定され、窯元は産地から離散し、二本松や郡山、白河、東京、埼玉等へ避難した。廃業した窯元も多く、大堀相馬焼は存続の危機に陥った。

しかし、福島県、浪江町などの行政機関や大堀相馬焼協同組合等が中心となり、震災の翌年である2012年（平成24年）には、浪江町から約

40km離れた二本松市内に「陶芸の杜おおほり二本松工房」を建設した。ここでは、2基のガス窯と1基の電気窯、ろくろ5台などが設置され、設備を失った窯元の作陶を支援した。松永（2021）によると、震災前後の動きの中で、当初25あった窯元は10に減少してしまったという。

4. 松永窯の系譜

1910年（明治43年）創業の松永窯は、戦後より製造小売も始め、1世紀以上にもわたり海外にも販売していた実績をもつ。松永窯三代目の松永和生は、1969年（昭和44年）の20歳から松永窯を継いだ。震災後は、二本松市にある共同窯に通い作陶を再開する。経済産業省や福島県の補助もあり、浪江町から約80km離れた福島県西白河郡西郷村に製作拠点を移し、自分の窯で再び作陶し始めた。地元に戻ってきた息子が、三代目の長男、松永窯四代目の松永武士（以下、武士〈たけし〉）という）である。

武士は、地域の伝統産業である相馬焼を復元しようとする若き企業家である。武士は、1988年（昭和63年）生まれで、18年間浪江町で育った。閉塞感の漂う故郷を離れたい気持ちが強く、憧れ

写真2 松永武士氏



（出所）同社より提供

の東京の大学へ進学した。「小さい頃は、粘土に触るのも嫌だった」ことから、家業を継ぐつもりは全くなかったという。大学在学中に会社を設立し、アントレプレナーとしてのキャリアを歩み出す。2010年（平成22年）5月には、ガッチ株式会社（以下、ガッチ。本社は東京・港区）を起業した。中国大連やカンボジアにわたって事業を立ち上げ、起業家としての実績を上げてきた。武士は、そんな折、東日本大震災が発生したのである。

5. 相馬焼窯元の存続危機

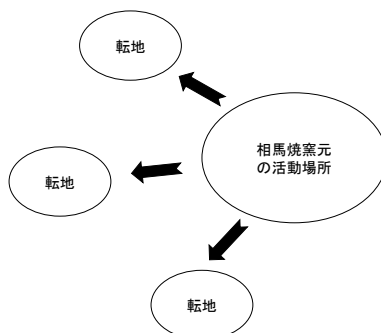
東日本大震災は、松永窯にも大きな爪痕を残した。窯のある建物は大きく歪み、事業の再開は困難な状況にあることは一目瞭然であった。三代目は、窯業を再開する気にはなれなかったという。武士は、大震災が発生したことを知ると海外から一時帰国し、親戚が避難していた仮設住宅を訪れた。多くの避難者が、仮設住宅に湯飲みや茶碗などを持ち込んでいることを知る。理由は、「大堀相馬焼を見ると浪江町を思い出す」「懐かしい」という避難住民の言葉であった。武士にとってこの経験は、大堀相馬焼を見直すきっかけとなった。浪江町にあった25の窯元は、半数以上が廃業するとともに、残った窯元も福島県の各地に移転しバラバラとなってしまった（落合、2022）。

写真3 松永窯の新工房（西村郷）



（出所）同社より提供

図1 震災後の相馬焼窯元



（出所）松永（2021）のに基づき、筆者が一部加筆。

武士は、このままでは産地が消滅してしまうという問題意識を持つに至る。武士は、窯元に生まれてきた立場として、相馬焼を存続していかねばならないという使命感に駆られたという。

ガッチの代表取締役も兼務する武士は、大堀相馬焼を復活させるために、海外で既存事業を売却した後、拠点を日本に移し、ガッチを「日本の伝統的産業」を扱う商社兼メーカーへと業態転換させた。松永窯も、震災後、福島県の西郷村に移転して再開した。

2021年（令和3年）に西郷村で構えた新たな工房には、四代目として住民の作品展示や交流ができるスペースを作った。窯を受け入れてくれた地域への感謝を示すとともに、大堀相馬焼協同組合とも連携し、経験者や陶芸家志望者を受け入れ、窯業の後継者の育成に力を入れている。松永（2021）によると、創業の地を離れたことで、得られた積極的な効果もあったという。第一に、原料の使用上の制約が緩和されたことである。元の産地から原材料が調達できない以上、相馬焼が復元するならば、自由な原料で作っても良いという雰囲気も醸成されてきたという。第二に、コミュニティのしがらみからの脱却である。元の場所では、ガッチでの先進的な発想を窯元に持ち込むことは難しかったであろう。第三に、土着性に対す

る新たなあり方である。確かに、商品力だけで競争することは難しい。一方、過剰な土着性だけでは、相馬焼の地域を超えた発信も難しい。時代の変化に適応し、新たな側面を取り込みながら、現代の相馬焼を再定義することにもつながっているようだ。

武士はガッチの経営者として浪江のそばや酒、陶芸品などをアピールするため、地元の業者と協働して、国内外を問わず積極的にイベントを開催している。大堀相馬焼の復活には、地域の復興が不可欠との意識がある。このような行動を通じ、現在のガッチは、大堀相馬焼を含む伝統産業の海外販路開拓の支援や、松永窯の製品開発から製造、流通、小売までを行うSPA（製造小売）の分野にも進出している。ここにきて、武士が作ったスタートアップと歴史ある松永窯とのシナジー効果が発現してきた。多くの窯元の弱点だった「商社機能」をガッチが担い始めている。今後は、この経験をもとにして日本全国で危機に瀕している伝統工芸品の振興に貢献し、日本の伝統的なモノづくりの価値を世界に発信しようとしている。

6. 地域に刻まれた相馬焼の記憶と復元

本ケースは、たとえ経営環境が変化し事業が離散したとしても、その地域に製品や技術が地域住民の記憶に刻まれ、そのことが事業承継者に事業を復元し存続させようとするインセンティブになることを示唆している。

武士は、大堀相馬焼を地元の誇りでありアイデンティティと捉えている。避難先の西村郷に建設した新工房では、約100点の大堀相馬焼を展示販売するスペースを設けたという。新工房は、相馬焼の製作だけではなく、相馬焼を生み出した地域の伝統文化の承継に役割も担っているようだ（落合、2022）。

2011年の震災から13年が経過しようとしてい

る。この間、コロナ禍のような環境変化も乗り越えてきた。他方、新たな課題も出てきている。一つが、次世代の相馬焼の担い手を確保していく取り組みである。松永窯では、若手の育成に力を入れている。浪江町では、地域おこし協力隊が組織され、地域で受け継がれてきた伝統産業の維持に力が注がれている。

約300年以上にわたって連綿と継承されてきた相馬焼の記憶は、地域の人々から簡単に消えるものではない。武士の取り組みは、窯元当主としての活動を超えて、相馬焼の伝統文化の復元と伝承を担っているといえよう。

【参考文献】

- ガッチ株式会社ホームページ（アクセス日：2023年11月22日）
<https://gatch.co.jp/>
- J-ware style ホームページ「新工房オープン 大堀相馬焼・松永窯」（アクセス日：2023年11月22日）<https://j-warestyle.com/2021/04/20/matsunaga-kiln/>
- 関満博（2014）「放射能災害により故郷を失った伝統工芸品産地－福島県浪江町の『大堀相馬焼』の行方」『地域開発』通巻602号、14-17頁。
- 外山徹（2000）「伝統的陶器産地における商品開発の新動向について」明治大学博物館研究報告第5巻、87-101頁。
- NextTalk ホームページ「『ツナイダ☆チカラ』第5回ニューヨーク編：大堀相馬焼が福島と世界をつなぐ（2018年12月11日号）」（アクセス日：2023年11月22日）
https://nexttalk-uniadex.com/_ct/17229792
- 初沢敏生・吉田聡子（2004）「大堀相馬焼産地の特性と技術伝承」『地域創造』第16巻第1号、22-26頁。
- 羽石修二（2012）「東日本大震災被災窯業地からの報告 後編」『陶説』通巻714号、45-61頁。
- 浜さ恋ホームページ「大堀相馬焼・松永窯三代目 松永和生さん 来春新工房開設」<https://hamasakoi.jp/archives/news1/101801/>（アクセス日：2023年11月22日）
- 早坂隆（2018）「ニッポンの匠－第11回大堀相馬焼」『Voice』通巻490号、198-205頁。
- 100年経営研究会ホームページ（2021）「第32回研究会 地域のアイデンティティである相馬焼を全国・世界へ（登壇者：1910年創業／大堀相馬焼 松永窯）」<https://100-keiei.org/report/20211109/>（アクセス日：2023年11月22日）
- ふくしまチャレンジはじめっぺホームページ「ガッチ株式会社 大学2年生で海外起業した男が、震災後福島に戻って大堀相馬焼を継いだ理由。」<https://www.fukushima-challenge.org/interview/2005.html#link1>（アクセス日：2023年11月22日）

双葉郡未来会議ホームページ「松永武士さん 浪江町」<https://futabafuture.com/2018/08/27/voice040/>（アクセス日：2023年11月22日）

松永武士（2013）『スマホの学習アプリで早慶にラクラク合格する方法』エール出版社.

松永武士（2021）「大堀相馬焼松永窯インプットトーク資料」.
松永陶器店ホームページ（アクセス日：2023年11月22日）
<https://soma-yaki.com/>

落合康裕（2022）「激動の時代に生き残る知恵 長寿を実現する老舗企業のレガシー（特集 ウィズコロナ時代の再成長ビジョン）」『月刊ビジネスサミット 2022年1月号』, 16-19.